

野菜・花きの営農情報


《7月中旬～8月中旬の技術対策》


令和元年7月18日発行
第3号
空知農業改良普及センター本所
Tel：0126-23-2900
Fax：0126-22-2838

【全作物共通】

- ① 夏場は多くの病虫害の発生しやすい時期となります。発生初期を見逃さないためには、ほ場観察が大切です。
- ② 農薬散布前には最新の作物登録内容を確認しましょう。また、農薬使用基準を守り、薬害や他作物への農薬飛散に注意して防除を実施して下さい。
- ③ ハウスやトンネルでは、高温障害に注意して管理しましょう。特に日差しの強い場合は、遮光資材などを利用し障害の発生を回避しましょう。
- ④ 前作終了後は、緑肥の導入や計画的な土壌消毒に努め、病虫害の軽減を図って下さい。

【野菜（果菜類）】

作物名	今後の留意事項・対応技術	病虫害・生理障害対策
メロン	<ul style="list-style-type: none">・収穫直前（5日前頃）の温度管理の目安 日中 午前 25℃、午後 20℃ 夜間 12℃程度 やや低めの温度管理で、糖の転流を促進しましょう。・収穫直前のかん水管理 かん水を極力控え、糖度の上昇を図ります。 日中、急激な高温等で萎れる場合は、走り水程度のかん水で萎れを防止します。	<ul style="list-style-type: none">・アブラムシが多発する時期です。発生状況に応じて薬剤を選択し、適期防除をしましょう。  <p>アブラムシ</p>
ミニトマト	<ul style="list-style-type: none">・気温の上昇に伴い、草勢の低下が見られます。各段位で花数が多過ぎると、草勢の低下や果実が十分に肥大できない可能性があります。摘花を実施し、一花房 30～40 個程度に制限しましょう。・着果数が多くなると蒸散も盛んになり、なり疲れを起こしやすい時期です。かん水はマルチ下の土壌水分を確認し、少量多回数とします。・奇形果の摘果やわき芽の摘心は晴天時の午前中に行い、傷口が午後には乾くようにしましょう。	<ul style="list-style-type: none">・花がらや葉先枯れから灰色かび病が発生しています。下葉や病葉の摘葉と早めの防除で対応しましょう。・換気による除湿に努めましょう。・収穫の終わった果房下の葉は摘葉し病害の予防に努めましょう。

<p>きゅうり</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 気温変化や生育状況に応じたかん水と追肥、ハウス内湿度の確保に努めましょう。 • 株に対する負担を極力抑えるために、摘心や摘果は遅れないようにしましょう。また、生育量に合わせて側枝を伸ばすなどし、草勢の確保に努めましょう。 • 葉の寿命は展開後 30~40 日程度です。1 株当たりの古葉の葉かきは 2 日おきに 1 枚程度にとどめましょう。 • 通路に敷きワラを施し、ハウス内の乾燥防止に努めましょう。 	<ul style="list-style-type: none"> • うどんこ病とハダニが発生しています。発生状況に留意し適期に防除しましょう。  <p style="text-align: center;">うどんこ病</p>
<p>かぼちゃ</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 肥大に必要な養分を確保するため、葉を健全に保ちましょう。 • 収穫の目安は花梗部にひびが入り、果皮の表面が堅くなってからです。 	<ul style="list-style-type: none"> • 果実に直射日光があたることで「日焼け果」になります。うどんこ病の防除を適宜行い、葉を健全に保ちましょう。
<p>いちご</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 日中の温度が 25℃以上にならないよう、循環扇を活用しましょう。 • いちごは、乾燥・過湿に弱い作物なので、朝の葉つゆの状況を見ながらかん水を行いましょ 	<ul style="list-style-type: none"> • 花びらの落ちが悪いと、そこから灰色かび病の発生につながります。薬剤防除のほか、こまめな換気などの耕種的防除も行いましょう。 • ハダニ、シクラメンホコリダニの発生に注意し、発生初期防除に努めましょう。

【野菜（葉茎菜類）】

作物名	今後の留意事項・対応技術	病害虫・生理障害対策
<p>たまねぎ</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 肥大期は病気にかかりやすい時期です。白斑葉枯病(灰色かび病)の発生は少ない状況ですが、葉が傷むと今後の肥大に影響します。 • 根切りは倒伏から 10~20 日で行いましょう。 	<ul style="list-style-type: none"> • 軟腐病やりん片腐敗病の発生により品質が低下します。防除を徹底しましょう。 • アザミウマ類が急激に増え、食害が目立ってきています。発生状況に応じて薬剤を選択し適期防除を行いましょう。
<p>露地ねぎ</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 最終培土は収穫目標の 25 日ほど前に行いましょう。分岐部の上まで丁寧に培土しましょう。 	<ul style="list-style-type: none"> • ネギハモグリバエやアザミウマ類が急激に増える時期です。発生状況に応じて薬剤を選択し適期防除を行いましょう。
<p>アスパラガス</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 水分不足は夏芽及び翌年の春芽の収量低下、穂先の開き、曲がりの原因になります。かん水は適切に行いましょう。 • うねの表面は過湿に注意しながら、常に湿った状態とし、うねの表面が白く乾いたらかん水しましょう。 	<ul style="list-style-type: none"> • 灰色かび病が発生しやすい状況です。適切な枝整理を行い、防除を実施しましょう。 • ジュウシホシクビナガハムシ、ヨトウムシ、アザミウマ類などが発生しやすくなります。ほ場をよく観察し、防除を行いましょう。

【花 き】

作物名	今後の留意事項・対応技術	病害虫・生理障害対策
カーネーション	<p>〈温度管理〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 遮光資材は、天候に合わせてこまめに掛け外しましょう。 <p>〈かん水管理〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 収穫時期間近のかん水は、切り花の水揚げや日持ちを悪くするため、土壌水分を確認し必要量をかん水します。ただし、極端な乾燥は避けましょう。 <p>〈その他管理〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 採花後は、STS 処理剤ごとの規定の濃度、時間を守り、適切に処理しましょう。 選花場内の湿度を下げるため、扇風機などを設置しましょう。 降雨後の採花は前処理時間を延長し、STS の吸収量が不足しないようにしましょう。 バケツは洗剤を用い洗浄を十分行い、前処理液の使い回しは避けましょう。 	<ul style="list-style-type: none"> アザミウマ類、ハダニ類など害虫の発生は多くなっています。定期的な防除に努めましょう。
作物名	今後の留意事項・対応技術	病害虫・生理障害対策
スターチス (シヌアータ)	<p>〈温度管理〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 高温により萎れが生じると、抽台莖や花穂の曲がりにつながります。高温時は遮光資材を設置しましょう。 <p>〈かん水管理〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 一番花の花穂が色づき始めたら、かん水を控え軟弱化を防ぎましょう。 一番花の採花が3割程度終了した頃から、二番花立ち上げに向け、かん水と追肥を徐々に再開しましょう。 <p>〈その他管理〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 採花の遅れは、灰色かび病や花卉の色落ち、莖葉黄化などのクレームの原因となります。花序の先端までがく片が展開したら採花適期です。遅れないように採花しましょう。 採花後、積算気温が 1800℃・hr を超えると莖葉黄化しやすくなります。選花場内は、通風を良くし、直射日光が入らないようにするなど室温を低く保ちましょう。 出荷時、低温庫から出してすぐに箱詰めをすると、箱の中で結露しやすくなります。箱詰め前には外気温にならし、箱詰め時には、紙をはさむなど湿気対策をしましょう。 	<ul style="list-style-type: none"> 枯れた葉は、灰色かび病等の発生源となるので、取り除いて処分しましょう 採花後や枯葉除去後に、殺菌剤を散布しましょう。 輸送中の灰色かび病発生防止のため、採花前に殺菌剤散布を行い、選花を厳格に行いましょう。 ハダニ類、アザミウマ類の防除を定期的実施しましょう。

★農薬を使用する場合は、必ず使用基準を守りましょう★